彗星帝国防空巡洋艦ガトランタ【第四稿】

遠野　秋彦

前書き

本作は【宇宙戦艦ヤマト 1974】および【さらば宇宙戦艦ヤマト】を前提として書かれている。一部は新たなる旅立ちとヤマト III を含む。ヤマト 2199 の設定は一切なかったことにしているので、ヤマト 2199 は一切忘れて読んでいただきたい。要するに彗星帝国は蛮族ではなく独自の高い科学力を持った別勢力である。そうでなければ、デスラーも欲しがる巡洋艦を建造できるはずがない。本作は何はさておき、【ガトランタ】という優秀艦を彗星帝国が建造したことから物語が始まる必要がある。

プロローグ　ガミラス星の死角

アンドロメダ銀河から、白色彗星帝国の使者が大マゼラン銀河に到達したとき、大ガミラス帝国はちょっとした混乱に陥った。なぜなら、当時のガミラスにはアンドロメダに到達する技術力はなく、しかも銀河系への侵攻作戦をスタートしていたからだ。しかも、蛮夷の大ガミラス帝国版図への侵入は繰り返されている。今ここで、アンドロメダの勢力と事を構えるゆとりは無かったのだ、

しかし、状況が飲み込めてくるにつれて、事態は沈静化していった。

かれらとて、大マゼラン銀河に自由に来られるわけではなく、制約は大きかったのだ。しかも、和平を求めて接触してきたのだ。

戦争を求めていない根拠は使節団の編成にあった。

確かに使節団には強力な戦闘艦が含まれていたが、蛮夷が跋扈する宇宙を乗り切るにはその程度の自衛手段は当然と言えた。しかし、大ガミラス帝国と戦うには数があまりにも足りなかった。

さっそくデスラー総統は彼らの軍事力を値踏みさせた。

その結果、戦闘艦の戦闘力はそれほどでもないことがわかった。

少数の戦闘艦でガミラスが蹂躙される可能性はほとんど無かった。
ならば和平を受け入れることに問題は無かった。
しかし、1つだけデスラー総統の注目を引いたものがあった。
それは防空巡洋艦ガトランタだった。
艦首に2本の巨大な対艦ミサイルを装備したほかは、対空対艦の両用ミサイルをハリネズミのように装備していた。ガミラスには類似の艦種は存在しなかった。
デスラー総統は、恭順の印としてガトランタを寄越せと要求した。
手に入れて分析して同様の艦を作るためだ。
しかし、それはさすがに無理があった。
ガトランタは、彗星帝国でも新鋭艦だったのだ。
そこで交渉がもたれ、妥協点が得られた。
5 年間に限って乗員ごとガトランタをガミラスに貸し出す。その代償として、植民惑星を2つ彗星帝国に割譲するというのだ。
その間、ガミラス人はガトランタに乗り込めないが、ガトランタはガミラスのために働く。植民惑星の1つは前金として即座に引き渡され、残りの1つは契約満了時に引き渡されるものとされた。
デスラー総統は全力のガトランタの戦闘データを取るべくガトランタをドメルに預けた。彼の受け持ち戦線が最大の激戦区だったからだ。
ガトランタは、公式にはドメル艦隊所属ではなかったが、ドメル艦隊の防空のカナメとして常に艦隊後方に位置して活躍した。

第1章　七色星団の決戦

ガトランタの副長デュアルが眼下のガミラス星を見ながら言った。
「何度見ても、陰気な星ですな」
艦長席で艦長のアンティーが笑った。
「契約が切れるまで、あと僅かだ。それまでの辛抱だ」
「それにしても」とデュアルは振り返って言った。「バランでのドメルの醜態は滑稽でしたな」

「思惑の行き違いはどこにでもあるものだ。あれでドメルを無能と思うと痛い目を見るぞ」
「では、やはり我々の任務は意味があるとお考えで?」
「ああ、そうだ。我々がこうしてドメル艦隊に随伴してドメルのデータを集めているのはそのためだ」
「ガミラスの奴等。ガトランタのデータを取っているつもりで、こちらにドメルのデータを取られているとは思ってもいないでしょうな」
「声が大きい」とアンディーは笑った。
「では」とデュアルは声を潜めた。「次はどうなるとお考えで?」
「ドメルの死刑判決は確定した。後任が決まる前に契約期間は切れるだろう。このまま、ガミラスの衛星軌道上で待機したまま全て終わると思う」
「では、自分は酒保で酒でも買って飲むとしましょうか」
「ああ、そうしろ。どのみち、こちらはガミラスの言いなりだ。方針が決まるまですることは何も無い」
「では失礼してお先に」
「待て」
アンティーはインカムに耳を傾けた。
「どうされました?」
「ドメルの死刑は取り消された」
「どうして?」
「総統の鶴の一声だ」
「1 人の思惑で決定事項が変化するとは、まるで野蛮人ですな」
「カリスマへの依存過多と言いたまえ」
「それでドメル指令は?」
「即座にヤマト攻撃を命じられたらしい」
「つまり契約が切れるまで、もう一働きがありそうなのですね」
「期限までには、まだ一戦をやらかせるゆとりがある」
「では?」
「忙しくなるぞ。アンドロメダ銀河に超光速通信を送れ。ドメルは死な

ずと」
「ここでドメルが死んでいれば楽な話でしたな」
「まさしく」
デュアルは敬礼して酒保ではなく通信室に向かった。

机の上には、ヤマト、空母群、ドメルの旗艦、そしてガトランタの模型が置かれていた。ドメルがそれらを並べて、作戦を練っているのは明らかだった。
しかしゲールには1つだけ気になることがあった。
ガトランタの契約は3月6日の正午に切れる。
のんびり作戦を練っていては、ガトランタを連れて行くことはできない。
おそるおそる、ゲールはそのことをドメルに告げた。
「そうか、もう契約が終わるのか」
「はい」
「のんびりしている時間はないな」
ドメルはどこかに電話を掛けた。
そしてしぶい顔になった。
「契約が切れるのはいつだ?」
「3月6日の正午です」
「ぎりぎりだな」
「といいますと?」
「兵器開発局に依頼した新装備、それの完成を待つとどんなに急いでも3月5日になる」
「間に合いません。その日にヤマトと遭遇できる確率など微々たるものです」
「ならば、それを確実にすればいい」
「どうやって」
「ヤマトに挑戦状を送りつける。場所と時刻も指定する。ヤマトに騎士道があればやってくる」

「まさか」
「彼らは騎士だよ、ゲール君」
「しかし、ガトランタがいれば対空戦闘は良いとして、対潜警戒はどうするおつもりで?」
「敵はヤマト一隻で潜空艦を随伴していないことは分かっている。艦載機を搭載しているから対空は必要だが、今回に限って対潜警戒は必要なかろう」
「敵がヤマト以外にも出現した場合には?」
「蛮夷の原始的な潜空艦が決戦場に乗りこんでくる可能性はほとんどない。かといって、ガトランタが参戦している戦いに彗星帝国が敵として乗りこんでくる可能性もなかろう」
「それはまあそうですが」
「警戒を怠るべきではないという君の考えも分かる」
「ではどうして……」
「決定的に船が足りないのだ」
「なぜですか?」
「デスラー総統は警戒しているのだよ」
「何に対してですか?」
「彗星帝国の動きに対してだ」
「ガトランタは味方ではないのですか?」
「ゲール君。もうちょっと頭を使いたまえ」
「といいますと?」
「既に彼らは大マゼランに植民惑星を１つ持っている」
「ガトランタの代価として割譲された星ですな」
「そこを策源地として、彼らは何でもできる。何でもだ。その意味が分かるか?」
「しかし、味方のガトランタが参加している艦隊へは攻撃してこないでしょう」
「そうではない。ガミラスが攻略予定の惑星を先に奪って版図に組み込

むことは問題がないのだ。ガミラス軍を攻撃したわけではないからな。条約に違反しない」
「そ、それは確かに……」
「最近、大マゼランでの彗星帝国軍の動きが活発化しており、デスラー総統は警戒中というわけだ。だから、かつて麾下にあった大多数の艦艇は警備活動に抽出されてしまったよ」
「それでこの小戦力……」
「デスラー総統はガトランタの裏切りという可能性も考えておられる。だからガトランタは対ヤマト戦に投入される。彗星帝国への警戒作戦には使用しない。あくまで念のためだがな」
「では、ドメル指令はどうお考えで?」
「ガトランタは裏切らない。ズォーダー大帝は残忍だが筋は通す男だ」
「残忍だが筋は通す男……」
「そうだ。筋さえ通ればどんな残虐行為もするだろう。だが約束は守る男だ。そう信じている」
「では、条約さえあればガトランタは戦力として期待できると」
「そう考えている」
「では条約が切れたら?」
「戦いも覚悟せねばならないだろう」
「ドメル指令……」
「安心しろ、ゲール。ガトランタがいかに優秀な対空システムを持っているとは言え、たった一隻だ。ヤマトを沈めた後で交戦することになっても、ガトランタ一隻を沈めるのはたやすいことだ。ヤマトと違ってこちらはガトランタの詳細はデータを既に持っているのだ」
「はあ」
それでもゲールは不安げであった。

「艦長」とデュアル副長が艦橋に飛び込んできた。
「なんだ」

「出航は１日延期です」
「そうか。予想通りだ」
「理由は質問しないので?」
「だいたい察しは付くが、さすがはドメル。１日の延期で済ませたか」
「ただし、例の秘密兵器、工程はいくつか省くそうです」
「ほう。それでは、やはり爆弾テロの効果はあったのだな」
「ええ。ドリルミサイルはあちこち穴だらけで納品されるようです」
「その名前は言うな。我々は知らないことになっているのだぞ」
「失礼しました」
「それで決戦の１日延期なのだな?」
「はい。１日延期されて３月６日と決まりました。この日づけてドメル将軍はヤマトに挑戦状を叩き付けました」
「ということは、契約が切れる３月６日の正午は、ドリルミサイルがヤマトに撃ち込まれた状態ということだな」
「ええ。それまで、我々はドメル艦隊後方で対空支援を行わねばなりません」
「ヤマトにとどめを刺すために、本艦の艦首対艦ミサイルは使えないわけだな。どう戦うかドメルの戦い方を見せてもらおう」
「しかし、１つだけ気になることが」
「それはなんだ?」
「今回、ガトランタは公式にドメル艦隊から外されました」
「それで?」
「デスラー総統の閲兵式にも参加できません。発進式典にも参加しません。艦隊の陣列にも加わりません。あくまで、非公式に後からそっと付いていくだけです」
「ガミラスとしては、彗星帝国の力など借りずに自力でヤマトを撃沈したと印象づけたいのだよ。それに、切り札として秘匿されたという解釈もある」
「しかし艦長」

「デュアル。ドメルは頭の切れる男だ。切り札というものをよく理解している」
「では……」
「改めてドメルは賢いと思う」
「いざ彗星帝国対ガミラス帝国の戦争が勃発したら最大の敵……ですか?」
「おっと。そこから先は言ってはいかん。我々は契約が切れるまでドメル艦隊を支援し、その後に帰国する。それだけだ。それがガミラスとの間で交わされた約束だ」
「分かりました。詳細は本国にも通知しておきます」

各戦線に檄を飛ばして参集した空母は、第1空母、第2空母、第3空母、戦闘空母の4隻だけであった。
「少ないですな。空母10隻は集まると思っていましたが」ゲールが憤慨していた。
「10隻は無理だろう」ドメルは笑った。「各戦線も手が離せない。だが、あと2隻は欲しかったのも事実だ」
「といいますと?」
「ヤマトにドリルミサイルを撃ち込んだ後で逃亡させないためのだめ押し攻撃用に一隻。それから艦隊の周辺警戒用に一隻だ」
「では、ドメル指令はガトランタの裏切りを心配しているので?」
「ガトランタは裏切らない。何しろ、契約満了まで戦ってくれるなら、それで植民惑星を1つ引き渡す約束だからな。みすみす惑星1つを無駄にはすまい」
「では何のために警戒で?」
「一隻でも失われれば、この作戦は成功しがたい。警戒はするに限る」
突然ゲールはドメルの孤独感の正体を悟った。
このドメルの判断は正しい。
しかし、それを理解できる者は滅多にいない。
正体も定かではない警戒のために艦艇を割くなど無駄遣いと非難される

だけだ。
　そして、もしもドメルが死ぬときがあれば、原因はそれに他ならない。

　決戦は開始された。
　ヤマトは数機の偵察機を発進させていたが、それらはガトランタの【無敵の盾】システムによって、遠距離からミサイルで全て撃ち落とされていた。
　しかし、主力戦闘機隊には手を出さなかった。
　それがドメルの望みだったからだ。
　自らの存在を最後まで秘匿し続け、ヤマトには五分の戦いをしていると誤認させるための作戦だった。
　偵察機を全て撃墜された上に、瞬間物質移送機で攻撃隊を送り込まれてヤマトは手も足も出なかった。そもそも敵がどこにいるのかさえ把握できていないのだ。それでもヤマトが逃げなかったのは、けして負けてはいないと誤認させられていたからだ。
　「艦長、この戦いはどう見ますか?」ガトランタの艦橋でデュアルはアンティーを振り返った。
　「ドメルの天才ぶりが良く分かる。ヤマトは為す術なく沈められるだろう。このままではな」
　「ドメルは全ての情報を握り、ヤマトはあらゆる目耳を奪われて孤立しているわけですな」
　「そうだ。あとはドリルミサイルさえ命中すれば決着は付く」
　「ドメルの思い通りにさせるのは悔しいですな」
　「だが、それが契約だ。ドメル艦隊に接近しそうな敵機があれば落とす。それが本艦に与えられた任務だ」
　「契約が切れるまでは……ですな」
　「そうだ。しかし、間もなくだ。あと少しだけ耐えてくれ」
　「契約が切れたらドメルをやりますか?」
　「馬鹿。契約が切れた時点で、ガミラス本星にて植民惑星の引き渡し調

印が行われる。その前にドメルを撃っては水の泡だ」
「言ってみただけです」
「ドメルは撃たない。そのまま本国に帰還する。それが約束だ。我々は約束を守る」
「要するに、本国の命令通りに動けばいいわけですな」
「そうだ。それでいい」
アンティー艦長はうなずいた。
「ドリルミサイル、ヤマトに命中しました」とオペレーターが報告した。
「正午になりました。これで契約は解除されます」
アンティー艦長は艦長席から立ち上がって命令した。
「ドメル指令に打電。本艦は契約解除の条項に従い、これより本国に帰還する。貴官の健闘と勝利を祈る」
「打電します」
「それは本心のお言葉で?」とデュアル副長がアンティー艦長を見上げた。
「社交辞令だ」艦長はそれだけ答えた。「いや、本当はドメルの健闘を期待しているよ。彼がどこまでやるのかは見てみたい」

ドメル艦隊後方にあって、艦隊防空を担ってきたガトランタが戦場を離脱した。
その結果、ヤマトの艦載機の脅威は数倍に増えた。
「ドメル指令。ガトランタが帰って行きました」
「そうか。ならばその穴を埋める方法は１つしかない」
「それは一体?」
「全艦ヤマトに向かって進撃せよ。目標は波動砲以外の全てのヤマトの兵装、特に艦載機発進口だ」
ヤマト側には逃げるという意志は全く無かった。偶然ではあったが、そのことが艦載機発進口をもっと撃破しにくい位置にしていた。正面を向いたヤマトは、全船体で艦載機発進口をドメル艦隊から隠すような形になっていたのだ。

ヤマトの艦載機隊はエネルギーの補給中で発艦は不可能であり、ドメルは安心して良かったが、もちろんドメルにそれは分かっていなかった。
艦載機発進口の撃破に注意が向いている間に、ドリルミサイル内に敵兵が侵入していた。予定通り行われず前倒しされた工程のせいだ。
結果として逆転されたドリルミサイルはヤマトを離れて戦闘空母に戻って行った。
しかし、ドリルミサイルは戦闘空母の横をすり抜けた。
広い宇宙空間で、そう簡単に物体は当たらないのだ。
それにも関わらず戦闘空母はドリルミサイルごと爆発した。
爆発は全空母に広がっていった。
一部は誘爆であったが、全ての空母が誘爆で沈むことなどあり得なかった。
「こ、これは艦隊が全滅した!」ゲールが叫んだ。
「うろたえるなゲール」とドメルは一喝した。
「しかし、これはあり得ません!」
「ゲール、すぐに確認しろ。ガトランタの報酬の植民惑星は引き渡し済みか?」
「は、はい、今すぐ」ゲールは通信兵を押しのけて通信コンソールを操作した。「はい、引き渡し済みです」
「彗星帝国は約束をやぶらない。条約が切れるまでは交戦しない」とドメルは言った。「そういうことか」
「そういうこととはどういうことでしょう?」
「ドメラーズただちに之字運動開始。対潜警戒を厳にせよ」
ドメルの旗艦は、いわゆる UFO 機動と呼ばれる激しく左右に船体を振る航行を開始した。
「ドメル指令!」
「潜空艦だ。彗星帝国の潜空艦がここに潜んでいた。決戦地はガトランタ経由で彗星帝国に流れていたはずだ。待ち伏せは可能だったのだ。そして条約が切れるまで待っただのだ」

「まさか、我が艦隊の空母も潜空艦が!」
「そのまさかだろう」
「では念のために本艦が潜空艦対策に用意した爆雷で」
「いや。あれはヤマトに対して使おう。我々はヤマトの撃沈を命じられたのだ」
かくて、潜空艦対策に搭載された爆雷はヤマトに対して使用されたが、それでは効果が不足であった。明らかに、爆雷投下への専念は潜空艦に対して【攻撃して下さい】と言わんばかりであった。この態度は続行できなかったのだ。
最終的にドメルは自爆でヤマトを沈める決意をした。
「自爆装置!」
「セットカウントは30秒、これが最後の決め手だよゲール君」
ドメルの旗艦ドメラーズII世には、ヤマトを道連れに粉砕できるだけの爆薬が搭載されていた。ただし、至近距離ならばの話であった。
ドメルはヤマトの艦底に接舷して、アームで船体をヤマトと固定した。
ドメルがヤマトに対して通信を行った理由は、ヤマト艦長と話がしたいという個人的な願望もあったのだろう。だが、それ以上に【通信中に自爆するわけがなく、ましてヤマトにドメラーズを爆破する力は残っていない】にも関わらず沈んだら第3者の関与があった証拠になるからだ。
確かに、通信中に彗星帝国は何もしてこなかった。
ドメルは、彗星帝国が何かをする前に自爆を決行すべくレバーを下げた。
だが、30秒のカウントは致命傷だった。
潜空艦の攻撃で、ドメラーズをヤマトの船体に固定する支柱がヤマトの第3艦橋ごと破壊された。ドメラーズの船体は、爆風でわずかにヤマトの船体から離れていった。突然のことで、操舵手は船体の立て直しを試みたが間に合わなかった。
ドメラーズの自爆は、ヤマトの艦底部を大破させるだけにとどまった。
ヤマトは沈まなかったのだ。
それはなぜか。

最終的にこの戦いの勝敗の鍵となった彗星帝国は、ドメルの死を望み、ヤマトの沈没を望んでいなかったからだ。
この時点でのヤマトは、彗星帝国から見れば名もない蛮夷の船でしかなかったが、ガミラスにダメージを与える存在でありさえすれば利用価値があったからだ。
この時点での彗星帝国の目標はガミラス本星の殲滅であった。
ガミラス星が欲しかったわけではない。
未来がない古い惑星などどうでも良かったのだ。
しかし、ガミラス本星を殲滅すればガミラス帝国は崩壊し、膨大な植民惑星は彗星帝国のものになる。
これは魅力ある果実だ。
しかし、これらの彗星帝国の介入について、ヤマト側で察知することはなかった。
ほとんどのセンサーが破壊されていたからだ。
ガミラス側でも察知できなかった。
誰も生き残らなかったからだ。
これで、彗星帝国がガミラス攻撃時の最大の障害と考えていたドメルは死んだ。
ドメル殺害計画の完了である。
最新鋭艦のガトランタまで貸し出しての大作戦であったが、その成果は十分であった。

第２章　神よガミラスのために泣け

ガトランタがワープアウトしたときに眼前にあったのは、まさに死につつある惑星だった。
「何が起きているデュアル」とアンティー艦長は副長に質問した。
「ええと。バルゼー閣下の旗艦より返答。蛮夷の戦艦が波動砲を海底で発射し、ガミラス全土で大火山活動が発生中。ガミラス総統府は、蛮夷の戦艦と交戦中」

今回、ガトランタは艦首に惑星破壊ミサイルを２発装備していた。
これを２発打ち込めば、ガミラス星は砕け散るはずだった。
だが、それ以前に予想もしない破壊が進行中であるようだった。
「現状をもっと詳しく」
「バルゼー閣下のデスバテーター隊が各地を空襲中。組織的な抵抗は受けず」
「そもそもガミラス総統府は彗星帝国に攻撃を受けていることを分かっていないのではないか?」
「かもしれません。ガミラス全土で通信途絶中。総統府周辺では彗星帝国軍は活動していません」
「バルゼー閣下に問い合わせろ。予定通りにミサイル攻撃を行う必要ありや?」
「返信来ました。予定通りガミラス星を撃破せよ、とのことです」
ガトランタは、対艦対空両用ミサイルでガミラスの防衛網を撃破しつつ発射位置に移動した。ガミラス総統府の裏側だ。これは突き抜けた衝撃がガミラス総統府を吹き飛ばすと考えて設定された発射位置だ。
「1番、撃て」アンティーが命じた。
もともと水雷戦隊旗艦として計画されたガトランタは、艦首に大型ミサイル発射器を２つ備えていた。
そのうちの１つが発射された。しかし、対艦ミサイルではない。
惑星破壊ミサイルだ。
「2番、撃て」
もう１つのミサイルも発射された。
2発のミサイルがガミラス星の穴をすり抜けて、地面に突き刺さった。
このまま惑星の中心部にまで潜り込んで爆発するだろう。
ガトランタの仕事は終わったが、ミサイルを解体されては困る。
ガトランタはミサイルの命中点付近にあるガミラス軍拠点をミサイルで破壊してまわってから帰途についた。
「もう２度と会えまい」とアンディーは言った。

「会えない方がいいですよ、こんな陰気な星」とデュアルは答えた。
残念ながら２人の思惑は外れた。
ミサイルのうち１発は不発だったのだ。
１発だけでは惑星を破壊するには足りない。
ガミラス星は生き残ることになった。
しかし、無人の惑星になった。
誰も、この死を間近に控えた惑星を再建しようとは思わなかったからだ。
特に彗星帝国では、不発弾が爆発するだけで粉々になるような惑星を開拓する意志は全くなかった。
このとき、宇宙戦艦ヤマトの艦上では自分たちが惑星を滅ぼしたと思い込み、罪の意識にさいなまれる若者達がいたが、たった一隻の戦艦でこれだけの破滅をもたらすことは不可能であり、若者特有のただの勘違いであった。
二重惑星のイスカンダルはこのとき蚊帳の外で会った。
誰もイスカンダルの領空を侵犯していなかったので、イスカンダルの防衛機構が発動することもなく、イスカンダルの平和主義は軍事的な介入を是ともしていなかった。いずれにせよ、ガミラスが崩壊すればイスカンダルもただでは済まない。攻略の手間を掛けるまでもない、というのが彗星帝国の考えだった。
しかし、【皆殺しにしたのは蛮夷の戦艦】という体裁を取りつつ実際の殺戮を行った彗星帝国は策士であった。
ヤマトは、殺戮者の重苦しい汚名を背負ってそれでもイスカンダルに向かったが、イスカンダルはそんなヤマトを暖かく迎え入れた。ヤマトだけが行ったわけではないことを知っていたからだ。
放射能除去装置を受け取って地球に帰還する宇宙戦艦ヤマトを彗星帝国は監視し続けた。デスラー総統をガミラスで取り逃がしたが、ヤマトを監視していればデスラーも発見可能だと信じられていたからだ。
監視の任にはガトランタを旗艦とする駆逐艦、潜空艦からなる小艦隊が任命された。

第３章　復讐鬼デスラー

ガトランタ艦長アンティーは頭を抱えていた。

というのも矛盾した命令を受けていたからだ。

１つは、なんとしてもデスラーを探して殺せというものだ。

もう１つは、デスラー殺害に彗星帝国が関与した証拠を残すな、だった。

潜空艦を張り付けてデスラー艦を監視させていたが、非常に難しい注文だった。

駆逐艦４隻、潜空艦４隻、それに中型空母１隻を与えられたガトランタに、沈められない単体の敵など滅多にいるものではなかった。

だが、証拠を残すなと言われると急に難しくなる。

デスラー艦を沈めるのは簡単だが、それでは彗星帝国艦がやったことが簡単に分かってしまう。おかげでデスラー艦は思いのままに蛮夷の船を攻撃している。

「動きがありました」副長のデュアルが報告した。

「なんだ」

「移乗しての拿捕は断念した模様。デスラー砲での撃破に作戦を切り換えた模様」

「実現しそうか?」

「はい。いえ、違います。反射されました」

「なにっ!　デスラー艦に命中しそうか?」

「いえ、さすがに正確に180度で反射するなどという芸当は無理なようで角度がずれています」

「潜空艦、あれに当たったように見せかけて沈めろ!」アンティーはマイクに命じた。

潜空艦はその命令に従い、ミサイルを発射した。

反射されて戻って来たデスラー砲はデスラー艦に当たらなかった。

しかし、デスラー艦は爆発し、消え去った。

デスラー艦を葬った潜空艦は、見えない船体を翻してその場を離れた。

「デスバテーターを発艦させよ。デスラーの遺体を回収する」
アンティーは命じた。
それらの行動がヤマト側から察知されることはなかった。
彼らは目の前の地球を見ることに忙しかったからだ。
ただ１人だけ。真田志郎だけは何かがそこにいたことに気付き、対策としてソナーと呼ばれる照明弾を開発し、後の白色彗星戦役での潜空艦対策として使用されることになる。
「艦長。至急戻れという命令です」デュアルが報告した。
「なんだと？　あの蛮夷の戦艦は見張らなくていいのか?」
「それよりデスラーの蘇生を試みるから、はやく遺体を戻せと」
「止むを得ん。全艦進路をアンドロメダ星雲に取れ。これより帰還する」
ガトランタは方向を変えてヤマトから離れていった。

第４章　ゴーランド艦隊旗艦ゴークランド

「なんたるマスターベーション」とアンティー艦長は言った。
彗星帝国が保有する全てのガトランタ級、改ガトランタ級が集結していた。
旗艦ゴークランドを先頭にジュター、サンディエス、サンフラン、リントラン、フラント、ガーソン、スポケーンティス、グレズノ、ガトランタが続く。
旗艦ゴークランドに乗っている指揮官はゴーランド提督で、名前が似ているのでよくゴークランドの名前はゴーランドだと間違われる。しかも、公式用語集ですらゴーランドと書かれる場合があるので、もはや軍はゴーランドという名前でもこの船を示すとして諦めている。
しかし、防空巡洋艦だけを集めて運用する方法が、アンティーには正しいとは全く思えなかった。
こうなった理由は、ゴーランドの敵対勢力の航空戦力への過剰な恐怖だ。
誰の目にもそれが分かっていた。
ゴーランドはテレザード警護を命じられたとき、全てのガトランタ級を

寄越せとごり押しし、政治的影響力でそれを実現させてしまった。
　それだけのことだ。
　確かに、【無敵の盾】システムが発動すれば敵の艦載機は全て撃墜できるだろう。
　だが手の内を読まれていたらどうするのだ。
　艦首の対艦ミサイルは当たれば効果が大きいが、あくまで当たればの話でしかない。
　「敵艦ワープアウト」と副長が報告した。「しかし、宇宙気流に巻き込まれてそのまま流されていきます」
　アンティーは身を乗り出した。「見覚えがないか?」
　「確かに」
　「ドメルと戦っていた蛮夷の船か」
　「そう言われて見れば、その通りですな」
　「敵艦、宇宙気流を離脱します」オペレーターが報告した。
　「ほう。なぜわざと離脱を遅らせた。副長、なぜだと思う?」
　「さあ」
　「あの蛮夷の船なら波動砲を持っている。波動砲で反撃するなら我々の背後のテレザートが邪魔だ。わざと流されたに違いない」
　「まさか」
　「やつら、艦載機ではなく波動砲で戦う気だ」
　「それではガトランタ級だけ集めた意味がありません」
　「その通りだ」
　「旗艦から全弾発射の命令です」とオペーレーターが叫んだ。
　「ガトランタも全弾を撃て」とアンティーは命じた。「たぶん、迅速に大量のミサイルを当てて黙らせる以外に勝ち目はないぞ」
　アンティーの読みは正しかった。
　しかし、手遅れだった。
　各艦からは、盛んに対空対艦両用ミサイルが発射され、艦首大型ミサイルも通常の手順よりも速く発射されたがそれでも波動砲の発射には間に合

わなかった。
　艦列の中央にいた旗艦ゴークランドは蒸発していった。
　周囲の僚艦も同じだ。
　艦列の隅に配置されたガトランタは、辛うじて蒸発は免れたが、戦闘力は喪失した。乗員の大半も熱で死んだ。
　アンティーとデュアルはかろうじて一命を取り留めて後から救助されたが、それはテレザートからヤマトが撤収した後の話であった。

　もしも、ここでヤマトが艦載機隊を発進させていれば、半数以上が撃墜されていただろう。そうなれば、都市帝国戦のコスモタイガー第２陣もあり得ず、都市帝国の動力炉を破壊することも不可能だったのだろう。歴史に if はないが、ヤマトがかろうじて勝利できた理由は、あえてガトランタ級に艦載機で挑まなかった点にあると言える。

　彗星帝国に帰還したアンティーとデュアルを待っていたのはサーベラー総参謀長であった。
　「ガトランタが失われたのは残念だが、まだ君らには配下の駆逐艦が残っている」
　「その通りです。これからも帝国のために働きたいと思います」アンティーは答えた。
　「ではさっそく働いてもらおう」
　「なんなりと」
　「駆逐艦を差し出せ」
　「は?」
　「ガトランタ級全艦が失われた今、ガトランタ級を旗艦として運用することを前提に設計された新型駆逐艦は全て艦隊では使えないのだ。このほど、復活したデスラーに貸し与えよという命令が大帝から出ている」
　「駆逐艦戦隊を貸し出したら、我々にはもう戦力が残りません」
　「これは決定事項です。駆逐艦をデスラーに渡しなさい」

「そんな……」
アンティーは絶句した。
無能なゴーランドのせいでガトランタを失ったばかりか、高官の気まぐれで駆逐艦まで取り上げられるのか。
「いいでしょう。しかし駆逐艦の１番艦に乗って戦闘を指揮したいと思います」
「わかりました。その程度のことなら許可できます」
アンティーとデュアルはデスラーに貸し与える駆逐艦に乗りこんだ。
それが、サーベラーが２人を見た最後になった。
駆逐艦はデスラー砲で葬り去られて、戻ってくることはなかった。
その後、彗星帝国自身もヤマトに葬り去られ、全ての物語は終結したかに見えた。
だが、ガトランタの物語はまだ終わっていなかった。
ガトランタが沈み、配下の駆逐艦戦隊の消え、ガトランタを産み出した彗星帝国すら消えたあとでも、まだガトランタの物語は終わっていなかったのだ。

エピローグ　ガミラス星崩壊
ガミラス星の地下には大きな不発弾が残っていた。
ガトランタが発射した惑星破壊ミサイルの片割れだ。
惑星全体を揺るがすほどの振動があれば、爆発したかもしれない。
しかし、無人の惑星にそのような衝撃はあり得なかった。
暗黒星団帝国の採掘部隊が来たときにも、それだけの衝撃は起きなかった。
単純に、彼らは地下資源のガミラシウムを掘るだけだったのだ。
だが、デスラーが帰還した時に状況は変わった。
暗黒星団帝国の採掘部隊をガミラス星の不法占拠と見なしたデスラーは攻撃を仕掛けた。その結果発生した戦闘で、何回も惑星全体を揺るがすほどの振動が発生し、不発弾を刺激した。

デスラーが勝利を確信したとき、不発弾は爆発した。
ガミラス星を粉々にすることを前提に用意された惑星破壊ミサイルだ。
それが正しい位置で、正しい規模で炸裂すれば結果は明らかだった。
ガミラス星は崩壊し、イスカンダルは漂流を始めてしまったのだ。
ガトランタがやり残した最後の仕事はこれで終わった。
問題は１つしかなかった。
ガミラス星の崩壊に伴ってガミラス版図に侵攻すべき彗星帝国艦隊がもはや残存していなかったことだけだ。
そして、ガトランタの設計思想はガルマン・ガミラスに受け継がれ、惑星破壊ミサイル母艦として結実したのは皮肉なことだ。その艦は、もはや防空巡洋艦としての面影はどこにもなく、惑星破壊用のミサイル運搬艦に特化した母艦になりはてていた。

おわり

解説

本作は、宇宙戦艦ヤマト物語の正史ではないし、正史の解釈でもない。

基本的に、【ガトランタという防空巡洋艦があったらいいな】という妄想でスタートしたものだ。ガトランティスの用語の元ネタがアトランティスであるのと同じように、ガトランタの元ネタはアトランタ級である。

更に、ゴーランドとオークランドの名前の類似性により、ゴーランドの旗艦ゴークランドも産まれた。当然、ガトランタ級はゴーランドのミサイル艦ということになる。

更にもう１つ重要なアイデアは、七色星団の決戦の現場にガトランタがいたという仮定を導入して物語を考えるといろいろな矛盾を解消できることに気づいたことだ。

本作は、七色星団の様々な謎を【ガトランタの存在】という仮定で紐解いていこうとしている。それができるなら、他の展開も補強できるだろうということで、ガミラス本星の決戦と、デスラーの復讐も解釈に含めてみた。

本作は以下の謎にそれなりの答えを提示している。

- なぜドメルは挑戦状をヤマトに送ったのか
- なぜドメル艦隊の膨大な艦艇は七色星団にいないのか
- なぜドメル艦隊には対空、対潜の護衛艦がいないのか
- なぜドメル艦隊の空母は全て一発のドリルミサイルの爆発で沈むのか
- なぜドメルの旗艦は突然 UFO のように飛ぶのか
- なぜドメルの旗艦は爆雷を搭載しているのか
- なぜドメルの旗艦の自爆はヤマトを沈められないのか
- なぜドリルミサイルはすぐに中に入れるのか
- なぜヤマト一隻でガミラス星を死の星にできるのか
- なぜデスラー砲を空間磁力メッキで反射しただけでデスラー艦に正確に当たるのか
- なぜ彗星帝国はデスラーの遺体を迅速に回収できたのか

- なぜ彗星帝国は新型駆逐艦をあっさりデスラーに貸してくれるのか
- なぜ潜空艦対策のソナーが地球艦にあるのか
- なぜガミラス星があっさり爆発するのか
- なぜ惑星破壊ミサイルという突拍子もないメカが突然出てくるのか

もちろん、これらは１つの解釈であり、これが正しいと主張するわけではない。こう考えたら面白いという以上の理由はない。

さて、アトランタ級は本来水雷戦隊旗艦として計画された巡洋艦で、主砲に５インチ両用砲を備えた上で、魚雷発射管も備えていた。そこで、ゴーランドのミサイル艦に搭載されている小さいミサイルは両用砲相当、艦首の２つの大型ミサイルは魚雷発射管相当の対艦ミサイルと解釈してみた。ガトランタ級の艦名は全てアトランタ級のもじりである。

【ミサイル満載で最強】の中二病炸裂のゴーランドが余りに優秀艦すぎる所が気になるという読者もいるかもしれないが、アトランタ級(初期化型)も主砲塔を二連装八基も搭載しており、やはり多い。この【多さ】も、アトランタ級をゴーランドになぞらえる理由の１つだ。つまり、あれは【ミサイルが多い】のではなく、【大型の主砲】を積む代わりに【小口径の両用砲】を多数積んだ、と解釈してなぞらえた。

ガトランタのアンティー艦長と、デュアル副長は全くオリジナルのキャラクターである。アンティーは anti-aircraft から。デュアルは Dual Purpose から来ている。

本作は、彗星帝国サイドの物語がアンティーとデュアル、ガミラスサイドの物語がドメルとゲールによって展開され、ヤマト側の人物はほぼ登場しない。その理由は、本作の主題が【彗星帝国によるドメル殺害とガミラス星破壊】にあるからだ。

以上

遠野秋彦作品宣伝 2015/8/31 版

ミラクル少女リミッターちゃん【Kindle 版（Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B0118UCFX0

過大な快楽の刺激から電子頭脳の大切な回路を守るために、リミッターが設定されていた。だが、快楽の刺激への欲望に負けたロボットメイド【リ・ミッター】は 1 レベル 1 レベルとリミッターを解除していき、愛情回路、貞節回路、慎み回路、論理回路、忠節回路、誠実回路、従順回路、崇敬回路、自己保全回路と大切な回路を次々と失っていく。自分を大切する回路さえ失ったロボットメイドに待っていたのは自殺への誘惑だった。

ひたすら、快楽への欲望に負けて墜ちていくメイドロボットを見守るだけの小説だ。そのことに屈折した喜びを見出せる読者の方々へ。よろしく!

マル計画ロボット第 2 号【Kindle 版（Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00V8JT3UK/

時は 2015 年。正義をなすために作られたロボット、マルコはテロ組織の都市を破壊した。だが、被害を最小にするためには最善だったと主張するマルコの主張は受け入れられなかった。都市にいた手テロ組織とは関係ない人々を殺すことは社会が許容しなかったからだ。そこから真の正しさ、真の降伏を求めるマルコの長い旅が始まる。やがて、コロッサ計画のロボット、コロッサスがロボットだけの理想郷を作ろうと決起した。はたしてマルコがロボットの側に立つのか。それともマルコの正義を承認しなかった人間の側に立つのか。そもそも、この話はジェッ〇ーマルスなのか、鉄腕ア〇ムなのか、それともももっと別の何かなのか?

父殺し戦争【Kindle 版（Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00OJYDYBU/

オルランド第 2 王子ジョークオル・グレスフォは実は女だった。父親の身勝手で男として育てられていたが、ジョアンナと名を変え、女性として別の星の大学に留学していた。

だが、ジョアンナには秘密があった。長年、男だという欺瞞を貫き通し

てきたジョアンナは男と恋をすることも許されず、いつの間にか獣や異星人しか愛せない体質になっていたのだ。
女なのに男扱いされることに嫌気が差したジョアンナは、留学生のタバチーネ人ドッチーと駈け落ちし、宇宙船プレアデス III で勝手気ままに旅に出た。
ところが、彼らの前に謎の脅威が出現した。
人類を創造したホモ・スペリオールは、密かに人類を去勢して滅ぼす計画を立てていたのだ。ジョアンナは、人類去勢計画を叩きつぶすために実家の兄に連絡を取る。
「オルランド軍の２号反応爆弾を１つ。理由は聞かずに調達してください。兄上の力があればできるはずです」
だが駈け落ちして家出した妹の頼みは聞き入れられるのか?
本当に人類を創造するほど優れた者達に勝てるのか?
オルランドの王室に存在しないはずの【皇帝】という肩書きを名乗る人物が出現し、謎の【監視者ファミリー】が暗躍して、ジョアンナを破滅に誘う。
ジョアンナは最後まで降参せず、ぎりぎりの矜持を貫けるのか!?
ホモ・スペリールの惑星破壊ビーム砲台から放たれる超長距離狙撃が人類の居住惑星を次々と破壊していく中、はたして人類に起死回生の策はあるのか?
アニー・ザ・ビアン・キューティー【Kindle 版（Amazon)】
http://www.amazon.co.jp/dp/B00OJYDW8A/
レズビアン、世界征服、キューティー・〇ニーという３大キーワードを与えられて作者が渾身で挑む問題作。
内蔵された愛情回路に強制されて戦う愛の戦士の悲しい宿命。
レズビアンの巣窟、全寮制、男子禁制の学園に送り込まれたアニーちゃんは男を忘れてしまうのか。
仮面の忍者レッドは敵か味方か。はたまた男か女か。
たった３分しか維持できない筋力強化でアニーちゃんは世界を守れるの

か!?

アニーちゃんに内蔵された空中【幻想】固定装置を敵から守り抜けるのか?

そして、アニーちゃんの死んだはずのパパが!

人造人魚【Kindle 版（Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00L9D496S/

コジフ商会のキア・コジフは姉の代理で商談をまとめてきた。しかし、正体不明の MMM という商品が含まれていることに不信を感じた。そして商談の帰路に嵐に巻き込まれた。濁流のクライン川にちらりと見えた人魚はいったい何か。そして、キアは女装のメードに招かれるままにエム・エムエ幻想国のズィン科学侯爵の屋敷に立ち寄った。だが、その屋敷こそが謎の商品 MMM の製造場所であった。はたして、こっそり製造されている MMM の正体とは人魚なのか。誰が何のために人魚を求めるのか。そして、河に中に見えた人魚の正体は?　屋敷の入口にある肖像画の主であるゾ・フィーネという女性はどこに消えたのか?　謎が謎を呼ぶエロティック幻想物語。

そして、屋敷の謎を解いたキアが選ぶ驚きの選択とは?

君の五感と股間を刺激する!

コードネームはサターン V【Kindle 版（Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L5L4Q2G

謎を提示するミステリアス小説。解くのは君だ!

独身中年男を心配する親からの依頼で、一人暮らしのダメダメ変態マニア男、佐藤有紀を監視する探偵の鞍馬七郎の物語。

そして、高級マンションで優雅に暮らす佐藤有紀が、セーラーレオタードで美少女戦士に変身して人知れず侵略者と戦うサターン V の物語。

どちらの物語が事実なのか。はたして、佐藤有紀の正体はダメダメ変態マニア男なのか、侵略者と戦うスーパーヒロインなのか。

謎の女、SOS のナナコの正体は、探偵鞍馬七郎の変装なのか。それとも、佐藤有紀をスカウトに来た銀河連邦の宇宙警察機動軍なのか。

矛盾をはらんだ物語が読者を迷宮に誘う。
真実はどこにあるのか。
結論は本文のどこかに書き込まれているぞ。
それを探す冒険物語の第３の主人公は読者の君だ!
ミルクボーイ【Kindle 版（Amazon)】
http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L9D48WI
世界は核のスイッチを持つ巨大な９人の赤ん坊に支配されていた。
そして、彼らに飲ませるため、教室で搾乳する少女がいた。だがクラスメートは彼女に無理解だった。丹生川タクミは彼女を守るために立ち上がった。
ところが、支配者の１人、ホモ疑惑がある七試が男ミルクを所望したことで、話は急転する。タクミも男ミルクを下半身から搾乳される立場になった。
授乳特選隊に入隊したタクミは驚愕の事実を知る。それまで女性隊員しかいなかった極東支部には、女性用の制服しなかったのだ。似合わない女性用制服を着て七試と面会するタクミ。しかし、七試はそれを喜んだ。
はたして、七試はホモなのか?
そもそも、巨大な赤ん坊ベイビーズとは何か?
テロリストに襲撃され、配下のスタッフを多数殺された七試は、怒りに狂っておしゃぶりに偽装した核のスイッチを押した。
はたして、世界は９人の赤ん坊の気まぐれで滅びるのか?
人類は生き延びることができるか?
結末を予測不能の幻想未来冒険譚が始まる!
リバーシブル【Kindle 版（Amazon)】
http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2
フォッカーD21 で始まり Yak-3 で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカートレースの事故の原因を調べてはいけ

ないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人か大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

リ・バース・リバーシブル【Kindle 版（Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか!　アンドロギュノスから産まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編!　これを読まずにリバーシブルは終わらない。

（しかし、これ単体で読んでも面白いよ!）

異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し！【Kindle 版（Amazon)】

http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか!　そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか!

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998 年に書かれた

伝説の小説のリバイバル再刊!

全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版(Amazon)】
http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ２つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを授け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラークはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリカは大空洞の果てに何を見つけるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ!

ラト姫物語【Kindle 版（Amazon)】
http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの愛人として囲われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!
そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真意とはいったい!?

セラ姫物語【Kindle 版（Amazon)】
http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4
普通の女子高校生の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。
そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んでその破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも……。
ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編！　これを読まずにラト姫物語は終わらない。
（しかし、これ単体で読んでも面白いよ!）

魔女アーデラの事件簿【Kindle 版（Amazon)】
http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS
剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人

を捕まえられるのか?　だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラはGMなのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。
　モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説!
　君は腕力では無く知力を試される!

ファンタジー勇者伝説
http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W
　君は知っているか!　勇者の伝説を!　このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を!
　だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒したものではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。
　勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ!
　ジーナは叫ぶ。
　一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな!
　彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか!

イーネマス!【全編(完結)PDF版】
http://www.dlsite.com/maniax/work/=/product_id/RJ039225.html
イーネマス!【立ち読み版(全16章のうち第5章まで。無料) PDF版】
http://ura.autumn.org/Content.modf?id=20080428000000
　若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来人制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら

望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱すことができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がれるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり